

「～ニクシ」の意味・用法の時代的变化-院政・鎌倉期まで-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, 明 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/7148">http://hdl.handle.net/2297/7148</a>

# 「ノニクシ」の意味・用法の時代的変化

— 院政・鎌倉期まで —

近藤 明

— はじめに

動詞に下接する「ノニクシ」の意味・用法については、中古のそれについて河辺名保子（一九五九）が、「ある事をするのが嫌だ、する気にもならない、ということ、対象から目をそむけるような感じである」との見解を、簡潔な形ながら示している。その後、詳細な論として松浦照子（一九八五）、林田昭子（一九九六）があり、前者は「本来の心情的な意味が保たれている」「ノニクシ」することが困難であるという意だけでなく、その困難さが心情に打撃を与える。不快感が伴うのである」とし、後者は「主として精神的理由により、動作の実現に対して動作主体に心理的抵抗が生じ、ためらっていることを表す」としている。更に漆谷広樹（一九九七）は、「ノニクシ」は専ら「精神的に不可能」な用法に限定され、「能力的に不可能」「精神的に不可能」の両方に用いられる「ノニクシ」とその点で異なる旨

を述べている。

その後時代を追って「ノニクシ」の意味・用法が拡大し、「心理的抵抗」「精神的理由」以外のものが増加していく過程については、漆谷広樹（一九九九）、舘谷笑子（二〇〇〇）において論じられている。漆谷広樹（一九九九）は、中世では「ノニクシ」の出現自体があまり盛んではないとしながらも、平家物語、十訓抄あたりからのそのような用例の存在を指摘し、狂言では用例も多くなり意味の上でも「質的に変化した」としている。舘谷笑子（二〇〇〇）は、林田昭子（一九九六）の見解を承け、大鏡の用例を「心理的抵抗」を伴わないものと見て、「平安時代末期から見られはじめ」ているとし、また抄物においてすでに「ノニクシ」がそれまで「ノニクシ」が担っていた領域にまで意味・用法を拡大しているとする。

いずれにせよ、室町期になると「ニクシ／ニクイ」の量的・質的拡大は相当顕著になってくるようであるが、中古と室町期の間にあって過渡期と見られる院政・鎌倉期の様相は、前述のような先行研究の成果はあるものの、「ニクシ」の用例自体が意外に得にくいこともあって、なお解明の余地が多分に残るようである。

なお、「ニクシ／ニクイ」は、当初は「心理的抵抗」を中心としていたものがそれ以外へと拡大していくといったわけであるが、館谷笑子(二〇〇〇)でも述べられているように、その点において近年における「ツライ」がそれと似た状況を呈しているように思われる。これを承け、近藤明(二〇〇四)では、近年の「ツライ」の状況との対照によって、「ニクシ」の語史研究に更なる課題や新たな着眼点が示唆される可能性を提示した。本稿でもこの観点を加えて、論を進めていきたいと思う。<sup>2)</sup>

まず次節では、現代語の「ツライ」について、不可能・困難をもたらす要因に基づいて分類し、整理しておく。続いて第三節以下では、その分類を中古・院政・鎌倉期の「ニクシ」に適用しつつ、整理・検討を進めていくことにする。

## 二 現代語「ツライ」の分類と許容度

### Ⅰ 心理的・精神的抵抗による困難

① いづらいい話だが、君にはもう金を貸せないよ。

(『現代形容詞用法辞典』)

② 信長という男は話しづらい大将だった。そっぽをむいているのである。

〔司馬遼太郎〕『国盗り物語』

『CD-ROM版新潮文庫の百冊』〔以下「百冊」〕 p.二七五

③ 対戦相手が先輩なので、どうも攻めづらくてしょうがない。

(『基礎日本語1』)

きまり悪さ・気がね・心理的負い目・気おくれ等が困難の要因となる場合で、『基礎日本語1』で「精神的理由から行為の遂行にブレーキの掛かる場合」としているのに相当する。

### Ⅱ 肉体的苦痛・五感への負担による困難

④ 足に豆ができて歩きづらい。

(『基礎日本語1』)

⑤ その下のほうの細長く実にごしゃごしゃと読みづらい文字

の中に、たしかに蔵王山辰次と載っているのを発見したとき。

(北村夫『榎家の人びと』「百冊」p.一一三)

Ⅲ 道具・器具の使い勝手の悪さ、物の取り扱いの不便さによる困難

⑥ このまんねんひつは古くなつたので、とても書きづらい。

〔外国人のための基本語用例辞典〕

⑦ 「最近の車のコンピュータ式のパネルって、慣れない方には扱いづらいですから」

〔村上春樹「世界の終りとハードボイルド」

ワンダーランド』「百冊」p二二六二

⑧ カボチャやパイナップルなどは、／「あんましツルツルしてつと持ちづらくて迷惑かけつかんな」／と、ミゾをつけたり、ザラザラをつけたり、把手の代わりに葉っぱをつけたりしているが、スイカはツルツルである。／持ちづらいことはなほだしい。

〔東海林さだお「タコの丸かじり」

朝日新聞社 p五二〇の箇所は原文では改行〕

道具・器具の使い勝手の悪さや、物の取り扱いの不便さ・物への働きかけの困難さによって主観的苦痛を感じる場合で、肉体的な苦痛・負担感につながる面が強い場合と、もどかしさといった精神的苦痛・負担感の面が強い場合がありそうである。

ここまでの「ゝツライ」は、筆者の語感では許容度が高いが、これらは精神的苦痛の意味か、肉体的苦痛・負担感の意味において、単独の形容詞「辛い」とのつながりを強く残していると言えそうである。

【IV 能力、外的条件による困難】

(a) マイナス評価を伴う場合

⑨ 「沈黙」の場合のようにアクションのきわめて少ない、純粹にいわば信仰の論理と心理に限定された微妙な動きを跡づけようとする場合、相手が外国人とあつては、いかにも書きづらいに違いない。

〔遠藤周作「沈黙」解説〔佐伯彰一執筆〕「百冊」p二五三〕

筆者の感覚では、I・IIと比べて「ゝツライ」の許容度は落ちるが、動作主の苦心・もどかしさ等が切実に感じ取られる場合、それほど許容度は落ちないようでもある。

⑩ この薪は燃えづらい。(作例)

のように非情物の性質を述べる場合、筆者にはほとんど許容不能であるが、徐修程(一九八三)は、期待・もどかしさ・じれったさを感じている人間の存在が想起される場合、「ゝづらい」が使える旨を述べている。

(b) プラス・マイナスの評価を伴わず、客観的性質として述べる場合。

典型的には、無意志動詞に接続して非情物の性質を客観的に述べるような場合。『明鏡国語辞典』(大修館書店 二〇〇二年)では、「自然現象を表わす動詞や非意図的な動詞には付きにくい」として「雨が降りづらい」を非文として挙げているが、近

年では次のような例も見られる。

⑪ 冬型の気圧配置のとき、札幌や岩見沢では特定風向以外では雪が降りづらいが、

(<http://www.sapporo.jma.go.jp/sp/kutyan/web/name/name.htm>)

(c) プラス評価を伴う場合

上接動詞の表す意味が好ましくないことで、それが困難であることにプラス評価が伴う場合。最も許容度が低いと考えられるものだが、近年、次のような用例も見受けられる。

⑫ 視聴者から寄せられた裏ワザは、底がすり減ったサンダルやビーチサンダルがぬれたところでも滑りづらくなる方法などを紹介する。(『朝日新聞』二〇〇四年八月三日

テレビ欄 「伊東家の食卓」

⑬ 防火衣 燃えづらい布でできています。熱や炎から身を守つてくれます。

(<http://www.city.sapporo.jp/shobo/works/>)

<http://www.city.sapporo.jp/shobo/works/>

IVの(b)(c)は、単独の形容詞「辛イ」の表す精神的・肉体的苦痛の意味との関係が著しく稀薄化し、意味の漂白化が進展しているものと考えられる。

### 三 中古(除院政期)の「ニクシ」

本節では中古(ここでは院政期は除くものとする)の「ニクシ」の状況を整理しておく。

【I 心理的・精神的抵抗による困難】

「ツライ」の場合のIと同様のきまり悪さ・気がね・心理的負い目・気おくれ、あるいは心理的動揺等が困難の要因となる場合であり、先行研究で言われているように、中古ではこれが大部分を占める。上接動詞が発話に関わる動詞である例、楽器の演奏に関わる動詞である例、歌を歌う意を表す動詞である例を、次に掲げておく。

⑭ 人の消息のなかに、よき人の仰せごとなどの多かるを、はじめより奥までいといひにくし。はづかしき人のものなどおこせたる返りごと。大人になりたる子の、思はずなることなどを聞くに、前にてはいといひにくし。

(三巻本枕草子 「いひにくきもの」段 一六九⑦⑧)

⑮ 和琴は、かの大臣の第一に秘し給ける御琴なり。さる物の上手の心をとどめて弾きならし給へる音いと並びなきを、こと人はかきたてにくし給へば

(源氏物語 若菜上 一〇五五①②)

⑯ なほかくわぎともあらぬ御遊びと、かねて思ひ給へたゆみける心の騒ぐにや侍らむ。唱歌などいといつかうまつりに

⑭の「いひにくし」は、林田昭子（一九九六）で言われているように「周囲の人々の反応が気にな」といった理由で「言ふ」ことに對して心理的抵抗が生じていることを表している。⑮は楽器の演奏に關することであるが、後掲の⑳⑳の例とは異なり、名人である「かの大臣」（柏木の父の太政大臣）に對する氣おくれという精神的理由による困難であらう。⑯は、技術的な問題ではなく、心の準備ができていかなかったために動揺したゆえの困難ということであらう。

〔Ⅱ 肉体的苦痛・五感への負担による困難〕

〔Ⅲ 道具・器具の使い勝手の悪さ、物の取り扱いの不便さによる困難〕

ⅡとⅢの間は、内省の利かない古語においては境界線を引にくい部分もあるため、ここではⅡとⅢを続けて扱う。

⑰三月つごもり方は冬の直衣のきにくきにやあらん、上の衣がちにてぞ殿上の宿直姿もある。

〔三卷本枕草子 「職の御曹子の西表の」段 九七⑧〕

は暑くて着にくいという肉体的苦痛によるものでⅡであらう。

また三卷本にはない段であるが、能因本枕草子には

⑱夏のうは着はうす物の片つつ方のゆだけ着たる人こそにくけれど、あまた重ね着たれば引かれてきにくし。

〔夏のうは着は〕段 〔校本枕草子〕 三〇三段（行目）

という用例があり、Ⅱか、衣類を道具・器具とすればその使い勝手の悪さとしてⅢか、どちらかに分類できそうである。

⑲明日も御ゆするは参りぬべかめり、さがなく御殿ごもりぬれば。おぼろげにまゐりにきき御髪のやうに」

〔宇津保物語 藏開中 一一一〇⑦〕

は、物（女一宮の髪）の取り扱いの不便さ・働きかけの困難さによるものであり、Ⅲであらう。なお女一宮の髪は「四尺の御厨子より多くうちはへて」という描写があり、量が豊かであつたらしい。その髪の多さゆえに「まゐりにく」というのであれば、量の多さ・嵩高さに基づくという点で、次の⑳や後掲の⑳⑳の例にも通じるものがある。

⑳笙の笛は、月のあかきに車などにて聞きえたる、いとをかし。所せくもてあつかひにくゝぞ見ゆる。

〔三卷本枕草子 「笛は」段 一一五〇⑯〕

は、「所せく」とあるところから、「笙はよこぶえのやうならでかさ高ければ也」〔『枕草子春曙抄』〕のように、大きいことによる扱いの不便さというものであらうか。となればⅢということになる。

これらⅡⅢは、先行研究では「心理的抵抗」「精神的理由」による例に含めて処理されている節がある。確かに、例えばⅡ

であれば肉体的苦痛・負担感のために「しするのが嫌だ」というものを、「心理的抵抗」「精神的理由」による例に含めるといふ考えも成り立ち得るだろう。その点で、ⅡⅢを「しニクシ」の分類として特立することの必要性については議論もあろうが、中古から院政期・鎌倉期にかけて連続性を持ちつつ段階的に変化していく過程、(殊に院政期の過渡期的様相)を把握する上で、一定の有効性があると判断する次第である。

#### 四 院政・鎌倉期の「しニクシ」

##### 四一 院政期

院政期・鎌倉期については、Ⅳ(a)の用例(である可能性のあるもの)を中心に見ていく。

② 孝徳天皇と申込みなどの御よにや、八省・百官・左右大臣・内大臣なりはじめ給へらん。(中略) 石川丸大臣、孝徳天皇位につきたまへの元年乙巳、大臣になり、五年己酉東宮のためにころされたまへりとこそは。これはあまりあがりたる事也。内大臣には中臣鎌子連也。年号いまだあらざれば月日申しにくし。

(大鏡 第一卷 六一①)

林田昭子(一九九六)はこの②の例を、林田昭子(一九九六)は、主に精神的理由・心理的抵抗によるためらいを表していた

「しニクシ」に、中古以降に生じた変遷の「始まりではないかと思われる例」とし、鏡合笑子(二〇〇〇)も「心理的抵抗を伴わない例とする。近藤明(二〇〇四)でもその見方に従い、Ⅳ(a)に相当する用例の早いものと見なした。

確かに、年号が存在しないという外的条件によつて「月日申しにくし」というのであるから、そこに④のような「心理的抵抗」があるとは考えられず、その点ではⅣ(a)に相当すると言つてよいだろう。ただし「申しにくし」の直前には、「石川丸大臣、孝徳天皇位につきたまへの元年乙巳、大臣になり、五年己酉、東宮のためにころされたまへりとこそは」という不祥事(しかも日本書紀の記事では讒言によるものとされている)への言及が見られる。

無論この「申しにくし」は、(左右大臣・内大臣が初めて置かれた時や、最初の右大臣である蘇我石川麿が殺された時の)年月が言いにくいということなのであるが、それに隣接する話題である、讒言を信じた皇太子のために内大臣が殺されたという不祥事を口にするのをはばかる気分が、多少なりとも投影されていると見ることはできないだろうか。そうであればⅠの「心理的抵抗」の要因も何がしか加わっていることになるし、ⅠからⅣ(a)への意味の広がり、どのような場合において先行して生じたかを考える材料にもなり得るのではないかと思ふ。

この他に

②4 高くかりたるも、下がりてつかひにくき調子なれど、うたひにくしと覚ゆることは無きぞ、この劫の致す所には覚ゆる。

(梁塵秘抄口伝集 卷第十 四六七⑬)

という例も、精神的動搖による⑩とは違つて、技術・能力的な問題として、IV (a) に属すると見ることができそうであるが、高声・低声への対応の困難という点では、IIの肉体的苦痛・負担という側面も含みそうである。また

②3 日頃はかやうに起こしまゐらするに、いと所せくだきに、くおぼえさせ給へるなりけり、いとやすらかに起こさせ給ひぬ。

(讃岐典侍日記 上巻 一四二行)

は、日頃は重くて抱きにくかつた(が臨終の近い今は軽くて簡単に抱き起こせる)ということであろうか。IV (a) の用例として分類する見方もあるだろうが、「ニクシ」の分類項目としてⅢを立てるとすると、むしろⅢに分類されるものであろう。この例と中古のⅢの例である⑬⑭⑯とでは、量の多さ・高高さの故に扱いが困難という点で共通性があることも、留意されて良いと思う。

なお次の⑳㉑等も、鎌倉期(細かく言えば㉑は南北朝期)の用例になるが、Ⅲに属するものであろう。特に㉑はやはり高高さの故に扱いが困難というものであり、この辺は中古以来の

連続性と言えようか。

②4 ウルハシキ牡丹ハ此ノ土ニイマダワタラズ。宋人コトニ秘蔵スルウヘニ、大ニシテモタリニクキ故ヘカ。

(塵袋 第三 一五五④)

②5 (神璽の箱が)もとの組は固くうつくし。今のは柔かにて、引けばのびつつゆくを、くつろがぬやうに強くとあれば、からげにくき事、言はむ方なし。

(竹むきが記 上 二七六⑬)

以上、②1はIV (a) であるとしてもIの側面を、②2は同じくIIの側面をそれぞれ含む可能性があり、②3はⅢに分類されると考えられた。純粹なIV (a) の出現・定着という点において、院政期は未だ過渡期的様相を示すと言えようか。

#### 四―2 鎌倉期

鎌倉期には、純粹にIV (a) の用例と見て差支えないものが認められるようである。漆谷広樹(一九九九)の挙げる延慶本平家物語の「はからひにくし」「射にくし」や十訓抄の「うつくしくし」がそうであるし、たまたま⑭⑯と上接動詞が同じか類義の「言ひにくし」「きこえにくし」の例であるが

②6 (源氏物語の批評は) 本に向かひてこそいみじきこともあはれなることもおぼゆれ。そらにはいとときこえにくくこそ

侍れ

(無名草子 二七〇⑧)

⑦陸奥国ラミチノクニト云フハ、ムツノオクト云フベキヲ、アシクミテミチノクトハ云ヒナセルカ、如何。

ツネニハサゾオモヒナラハシタレド、六ト云フ所ノナカラ  
ンニハ、ソレガオクトモ云ヒニクキニヤ。

(塵袋 第二 九五②)

も、まず純粹なIV (a) の用例として考えられそうである。

鎌倉期は「ニクシ」の用例自体が少ないという問題はあ  
るものの、院政期と比べると、純粹なIV (a) の用例が認められ、  
その定着が進みつつある時期と言えよう。

以上、院政期・鎌倉期は、「ニクシ」の用例自体が少ない  
(特に鎌倉期において) という問題点はあるものの、やはり  
「ニクシ」の変化は段階的かつ着実に進行していたというこ  
とが言えるかと思う。

ところで、林田昭子 (一九九六) は中古の「ニクシ」につ  
いて、「無生物主語の動詞を上接し得ない」ことを指摘してい  
る。また現代語の「ツライ」についても、第<sup>二</sup>節で触れたよ  
うに「自然現象を表わす動詞や非意図的な動詞には付きにくい」  
〔明鏡国語辞典〕との指摘があったが、それはIにおいては  
当然の制限であろうし、IV (a) の段階まで行っても、前述の

ような動作主の苦心・もどかしさ等を感じ取られる場合であ  
れば、そのような制限を受けやすいであろう。「ニクシ」の場  
合、IV (a) は鎌倉期において定着が進みつつあるものの、こ  
のような動詞が上接動詞である用例の出現は、室町期をまたな  
ければならないようである。更にIVの (b) や (c) に相当す  
るものの出現・定着も、室町期以降ということになるようであ  
る。それらの詳細は別稿に譲るが、このような観点からも、鎌  
倉期頃までの「ニクシ」の勢力拡大の段階的進行の一面が  
見て取られるし、そのような観点が得られるという点でも、現  
代語「ツライ」との対照の有効性が指摘できる、ということ  
は言えようかと思う。

### 〔注〕

- (1) 院政・鎌倉期までを対象とする場合は「ニクシ」と表  
記し、「ニクイ」の形が増えた室町期以降も含めて言及  
する場合には「ニクシ/ニクイ」と表記することにする。
- (2) 無論「ニクシ」「ニクシ」と「ツライ」「ツライ」の  
意味が全く同じというわけではなく、過度に両者を重ね  
合わせて考えることにも弊害があるうから、その点には  
留意を要しよう。

(3) 筆者の周囲の学生・院生に尋ねてみたところでは、ほぼ

同様の結果であったが、⑥については「少し違和感を感じる」とする向きもあった。

(4) 楽器に関しては、他に「琴なむ猶わづらはしく、手ふれにくきものはありける」(若菜下 一一五七⑫)という例があるが、これも単に技術的困難というよりは、昔の名人などが思い起こされての気おくれという面が強いようである。

(5) 「楽器としての笙の構造の複雑さ、吹奏技法の複雑さ」(萩谷朴『枕草子解環』をいうとする解釈もあるが、「特別の技を弄する必要なく、童子にてもこれを吹くに易き」(山田孝雄『源氏物語の音楽』)と技術的にはさほどの困難性は無いとの見解があり、大きさの方を主たる要因と見る。例えば⑫の例の場合、林田昭子(一九九六)では「笛を扱うことに抵抗感が生じている」として心理的抵抗による例に含めている。

(7) この時期の「ニクシ」の用例の少なさについて、漆谷広樹(一九九九)は「ガタシ」が「和漢混淆文体など漢文体と関わりのある作品」においては盛んに用いられるとしてそれとの関係を示唆しており、館谷笑子(二〇〇〇)も、軍記物語をはじめ漢文訓読的な文献では「ニクシ」の用いられることが少ない旨述べている。しか

し和文系の文献においても「ニクシ」の使用が少ないことが安部清哉『鎌倉時代十四文学作品の形容詞用例数語彙表』(『玉藻』三六、二〇〇〇)によっても知られる。なお考察を要するところであろう。ちなみに

衰老のものにて、齒もなくてくひわづらひたるを見  
て (古今著聞集 卷第十六 四一九⑮)

のような「ワヅラフ」も、主観的困難性を表す点において「ニクシ」との類似性があると思われるが、このような語との関連等も考慮されてよいことも知れない。

#### 〔参考文献〕

浅田秀子・飛田良文(一九九二)『現代形容詞用法辞典』(東京堂出版)

漆谷広樹(一九九七)「平安時代和文における不可能性表現の位相について」(『日本語の歴史地理構造』明治書院)

漆谷広樹(一九九九)「ニクシ」と「ガタシ」の語誌  
(『国語語彙史の研究』十八) 和泉書院

河辺名保子(一九五九)「ねたし」(『源氏物語重要語句の詳解』の二項目) (『国文学解釈と鑑賞』一四二二) 『源氏物語ハンドブック』

小矢野哲夫(一九八〇)「現代語可能表現の意味と用法(Ⅱ)」

〔大阪外国語大学学報 言語〕四八

近藤 明(二〇〇四)「『ニクシ』/『ニクイ』の語史への一視点

―現代語「ツライ」との対照から」(『金沢大学教育学

部紀要 人文・社会科学編』五三)

渋谷勝己(一九九三)「日本語可能表現の諸相と発展」(『大阪

大学文学部紀要』三三―二)

徐 修程(一九八三)「『にくい』と『づらい』の異同につ

いて」(『日本語教育研究論纂』二)

館谷笑子(二〇〇〇)「複合形容詞『―ガタシ』『―ニクシ』

〔国語語彙史の研究 十九〕 和泉書院

林田昭子(一九九六)「『にくし』『かたし』に関する一考察」

〔山口国文』一九

文化庁(一九九〇)『言葉に関する問答集 第16集』問39

松浦照子(一九八五)「複合形容詞の形成と継承―平安時代

散文作品における―」(『国語語彙史の研究 六』和泉書院)

森田良行(一九七七)『基礎日本語Ⅰ』(角川書店)

山田俊雄(一九九九)『ことば散策』(岩波新書)

〔資料〕(第三節以降で引用したもの。カッコ内に記載のあるもの以外は、旧日本古典文学大系による。また問題とする語以外は、表記に手を加えた場合がある。)

宇津保物語(宇津保物語本文と索引) 三巻本枕草子 能因本

枕草子(校本枕草子) 源氏物語(源氏物語大成) 大鏡 讀

岐典侍日記(校本讀岐典侍日記) 梁塵秘抄口伝集 無名草子

(日本思想大系) 古今著聞集 塵袋(平凡社東洋文庫) 竹

むきが記(新日本古典文学大系)

〔付記〕

中古の「ニクシ」に関しての見解には、草野(現姓石倉)

千亜紀(一九九二年卒業)の卒業論文が基になっているとこ

ころがある。

用例の検索に当たっては、公刊されている索引類やCD―R

OMに加えて、国文学研究資料館「日本古典文学本文データベ

ース」を使用した。また安部清哉『鎌倉時代十四文学作品の形

容詞用例数語彙表』(『玉藻』三六 二〇〇〇)『軍記物語五作

品の形容詞使用頻度順対照語彙表』(『フェリス女学院大学文学

部紀要』三〇 一九九五)にも恩恵を受けた。

本稿は第七七回国語語彙史研究会(於京都光華女子大学)に

おける口頭発表の内容の一部を基としている。当日御意見・御

教示を賜った方々と、会場校で格別のお手数をおかけした玉村

禎郎氏(現杏林大学)にお礼申し上げます。

(本学教員)